２．京田辺市興戸２号墳の石製品

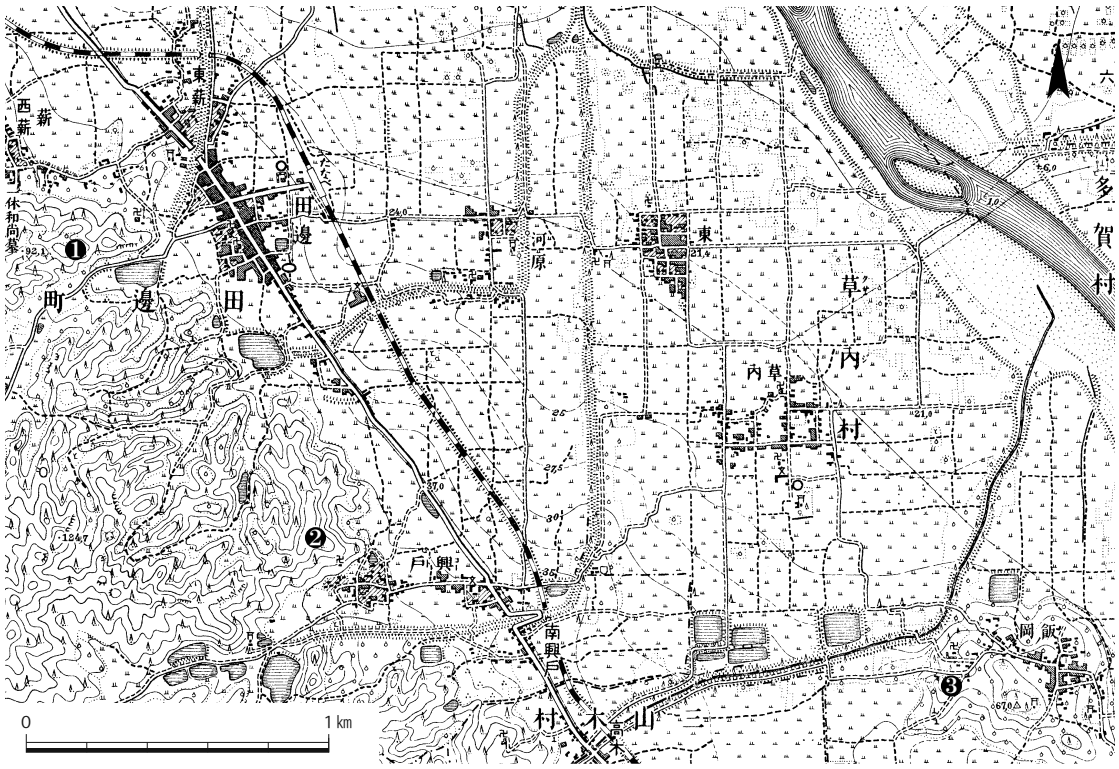
二村真司

１．はじめに

興戸２号墳（寿命寺古墳）は、京田辺市興戸山添に所在する直径約 28m の円墳である。木津川両岸に広がる山城盆地を東に見下ろす南北に細長い丘陵上（標高約 88m）に立地し、木津川との比高は約 55m ある（図１）。全長約 24m で前方後円墳の興戸１号墳等の隣接古墳や、弥生時代後期の方形台状墓を含めた 10 基で興戸古墳群を構成する（西川ほか 1982）。

興戸２号墳は大正３年（1914）に盗掘を受け、犯人逮捕に伴い押収された資料は他古墳から盗掘された資料と混在した状態で「北和城南古墳出土品」として奈良国立博物館に所蔵されている。また、戦中・戦後にかけて資料採集や発掘調査が断続的に行われ、採集・出土資料は京都府立山城郷土資料館と京都大学総合博物館が所蔵している。

興戸２号墳からは多種多量の石製品が盗掘あるいは採集・発掘されており、その点数は副葬器物の中でも際立っている。本稿では、近年の「北和城南古墳出土品」に関する研究成果（鐘方ほか 2018）を参照しつつ、本墳に副葬された石製品の全体像を復元して報告する。



１：天理山３号墳　２：興戸２号墳　３：飯岡車塚古墳

図１　興戸２号墳と周辺の前期古墳（S=1/25000）

２．興戸２号墳の石製品の経緯

（１）興戸２号墳の盗掘と発掘調査

興戸２号墳を 1914 年に盗掘した犯人グループは、その後も京都府南部を中心に盗掘を重ねた。犯人たちは大正５年（1916）に奈良県佐紀陵山古墳を盗掘したいわゆる皇陵盗掘事件をきっかけに逮捕され、裁判で有罪判決を受けた。盗掘品は押収され、昭和 12 年（1937）に当時の奈良帝室博物館に引き渡された（井口 2004、鐘方ほか 2018）。

興戸２号墳では盗掘後も遺物が散乱し、終戦後に田辺中学校の生徒が遺物を採集したとの伝聞がある（梅原 1955）。また、郷土史家の粟野謨が興戸２号墳で石製品を採集し、資料は旧田辺町へ寄託された後に京都府立山城郷土資料館に寄贈されている（鐘方ほか 2018）。さらに、郷土史家の片山長三は墳丘で採集した家形埴輪片を京都大学考古学教室に貸与し、他にも鏡片や石製品片が確認されたことを伝えた（梅原 1955）。この連絡がきっかけとなり、京都府史蹟調査会と京都大学考古学教室によって発掘調査が行われた。調査は昭和 18 年（1943）4 月 25 日に単日で実施され、割竹形木棺を納めた部分が空洞として残る粘土槨が検出されたほか、残存していた資料が採集された（梅原 1955）。この調査時の出土品と調査前に片山が採集していた資料は昭和 42 年（1967）に京都大学文学部博物館へ寄贈され、現在は京都大学総合博物館が所蔵している（小野山ほか編 1968）。

（２）各館所蔵資料の報告・研究状況

①京都大学総合博物館所蔵資料（図表中はＸで表記）

石釧片７個体分と鍬形石の小片２個体分、管玉（片）４点（１点は完形品）、臼玉１点が所蔵されている。1943 年の発掘調査の概要は 1955（昭和 30）年に『京都府文化財調査報告』第 21 冊で報告され、一部の資料の実測図と写真が公表された（梅原 1955）。また、これらの資料は昭和 43 年（1968）発行の『京都大学文学部博物館考古学資料目録』に収録され、古墳時代Ⅱ期（４世紀末～５世紀末）に位置づけられている（小野山ほか編 1968）。

本資料の鍬形石は小片であるためか分類・編年研究の俎上に載せられることが少なかったが、櫻井久之は抽出可能な属性を整理して、その評価を提示している（櫻井 1991）。石釧は蒲原によって６点がデザインと彫刻表現をもとに分類されている（蒲原 1987）。

②京都府立山城郷土資料館所蔵資料（図表中はＹで表記）

石釧片 10 個体分と鍬形石片２個体分が所蔵されている。資料は『田辺町遺跡分布調査概報』で実測図と写真が公表され、装飾表現の特徴が整理されている（西川・鷹野編 1982）。

本資料の鍬形石も櫻井による属性整理と分類がなされたほか（櫻井 1991）、北條芳隆は鍬形石全体を２群に大別して編年する中で、うち１点（図 2-1）を両群の折衷的資料と評価した（北條 1994）。また、髙木清生は突起部が通有の鍬形石とは逆の左側につく「逆位の鍬形石」を集成・検討する中で本例を類例として取り上げ、その製作時期や型式学的な位置づけを再検討している（髙木 2021）。石釧は分類・編年上の位置づけが提示されていない。

③奈良国立博物館所蔵「北和城南古墳出土品」（図表中はＺで表記）

銅鏡・石製品・玉類・耳環・鉄刀からなる資料群で、石製品は鍬形石９点、車輪石 17 点、石釧 27 点（うち１点は滑石製品）、紡錘車形石製品４点、筒形石製品１点で構成される。奈

良県北部から京都府南部にかけての地域に所在する古墳から出土したと推定され「北和城南古墳出土品」と呼称されたが、資料の由来は不明であった（井口 2004）。その後、井口喜晴が資料を紹介するとともに、裁判所から他器物とともに引き渡された台帳未登録の鉄刀に添えられた付箋の内容を足がかりに、「北和城南古墳出土品」が一連の盗掘事件により押収された資料であることを確認した（井口 2004）。さらに 2017 年には報告書が刊行され、全資料の実測図と写真および詳細な観察所見が公表された（岩戸ほか 2017）。

「北和城南古墳出土品」の石製品は残存状況の良好な資料が多く、器種やデザインのヴァリエーションにも富むためか、多くの研究で取り上げられてきた。鍬形石は、川西宏幸が同工品の事例として 1 点の資料を挙げ、大和北部勢力と北東部勢力との「政治上のつながり」の深さを示す資料と評価した（川西 1981）。続いて櫻井、蒲原、北條、河村好光による分類・編年研究では鍬形石全体の中における系統・段階的な位置づけが、全 9 点もしくは一部の資料に与えられている（櫻井 1991、蒲原 1991、北條 1994、河村 2015）。また、小田木治太郎は類似品群や小型品の存在を通して川西の同工品論や既存の編年研究を再検討する際に、「北和城南古墳出土品」中の多くの資料を用いている（小田木 2010）。車輪石は三浦俊明によって個々資料の段階評価の内訳が提示されている（三浦 2005）。石釧は蒲原による分類のほか（蒲原 1991）、滑石製の 1 点については特異な彫刻文のある資料として着目され、装飾表現の作出方法や穿孔技術について詳細に分析されている（杉山 1985、岩戸ほか 2017、久永 2018）。

（3）裁判記録の分析と接合関係の検討による「北和城南古墳出土品」の研究

鐘方らは、2005 年刊行の『陵墓等関係文章目録―末永雅雄先生旧蔵資料集―』第 1 集で公表された奈良地方裁判所予審判決文（奈良県立橿原考古学研究所編 2005）や、法務省法務図書館が保管する諮問調書や見分調書などの皇陵盗掘事件の裁判記録を緻密に分析した。その結果、盗掘古墳と遺物の詳細や、押収された遺物が売却済みのものを除いて裁判所から奈良帝室博物館に引き渡された経緯が明らかになった（鐘方ほか 2018）[1)]。石製品については、興戸 2 号墳（京田辺市）・尼塚 4 号墳（城陽市）・西山 6 号墳（城陽市）の資料が混在していることを突き止め、複数の犯人が供述した盗掘点数や盗掘品の形態的特徴を検討することで、各古墳における器種ごとの盗掘点数を復元した。その成果によれば、石釧は上記 3 古墳の資料が、鍬形石と車輪石は興戸 2 号墳・西山 6 号墳の資料が混在し、紡錘車形石製品と筒形石製品は興戸 2 号墳のみから盗掘されたという。さらに、京都大学総合博物館所蔵資料、山城郷土資料館所蔵資料、「北和城南古墳出土品」の破片資料の接合関係について検討し、3 館が所蔵する鍬形石片が接合することを指摘した（鐘方ほか 2018）。上記の接合関係は、水野敏典による三次元計測によっても検証され、加えて石釧の接合関係も確認されている（水野 2021）。

3．本稿の目的と手法

（1）本稿の目的

鐘方らによる裁判記録の分析と接合関係の検討によって、興戸 2 号墳に副葬された石製品の全容が明らかになりつつある。しかし、個々の資料の詳細な分析や石製品全体の評価はされていない。特に最多点数の石釧は、蒲原の編年（蒲原 1987）以降に着目された製作技術や石材などの観点を加味して年代的評価を再検討する必要がある。

以上の課題を受け、本稿の目的は以下の２点とする。１点目は、鐘方らの成果に基づき興戸２号墳の石製品を整理し、その全体像を復元することである。２点目は、個々の資料を分析して資料群の時間的位置づけを明らかにするとともに、器種や形態的特徴、製作技術や石材の組合せから、興戸２号墳に副葬された石製品群の特質を評価することである。

（２）本稿の手法

本稿では興戸２号墳で出土した可能性の高さに応じて、３館の所蔵資料を以下のＡ～Ｄのランクに区分する。また、興戸２号墳の石製品としてＡ・Ｂランクの資料を抽出して評価する。

Ａランク…興戸２号墳から出土したことが確実な資料

Ｂランク…興戸２号墳から出土した決定的な証拠に欠けるが、その可能性が高い資料

Ｃランク…興戸２号墳から出土した証拠に欠け、他古墳出土の可能性が同程度ある資料

Ｄランク…興戸２号墳から出土した証拠に欠け、他古墳出土の可能性の方が高い資料

分析の手順は、まず鐘方らによる分析結果を踏まえＡランク資料を抽出し、分類・編年研究上の位置づけを図ることで、Ａランク資料の時期[2]とデザイン・製作技術・石材[3]上の特徴を明らかにする。次に、赤色顔料の付着状況などの副葬時の状況（＝使用の局面）に由来する要素を検討して、「北和城南古墳出土品」からＢランク資料を抽出する。さらに、Ａランク資料とＢランク資料とでデザイン・製作技術・石材上の特徴や時間軸上の位置づけを比較し、両ランクの資料に同じ特徴が認められるかどうかを確認する。最後に、Ａ・Ｂランクの資料を合わせて興戸２号墳に副葬された石製品の全体像を復元し、その器種・点数・組成を評価する。

４．Ａランク資料の報告と評価

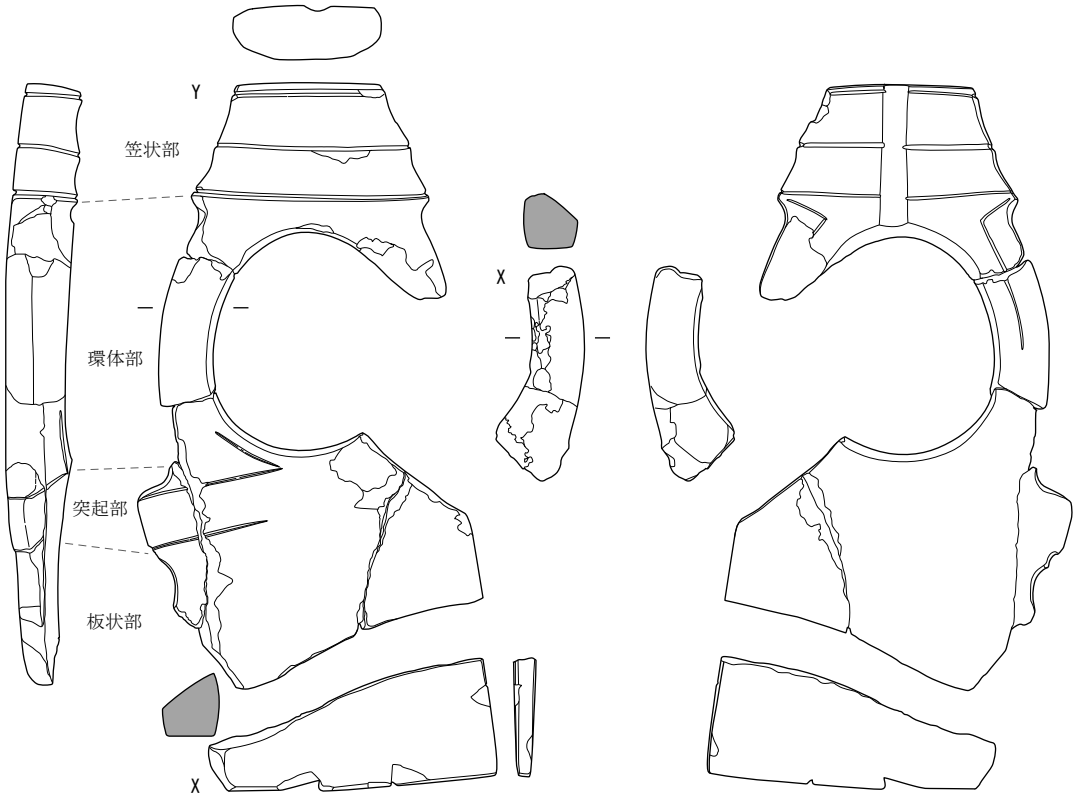
（１）Ａランク資料の概要

Ａランク資料は、京都大学総合博物館所蔵資料（X）と山城郷土資料館所蔵資料（Y）、および奈良国立博物館所蔵の「北和城南古墳出土品」（Z）のうち前２者と接合関係にある資料と、興戸２号墳から盗掘されたことが供述から明らかになった紡錘車形・筒形石製品からなる。接合関係を加味した器種別の点数は、鍬形石２点、石釧 15 点、紡錘車形石製品４点、筒形石製品１点、玉類５点（管玉４点・臼玉１点）である。

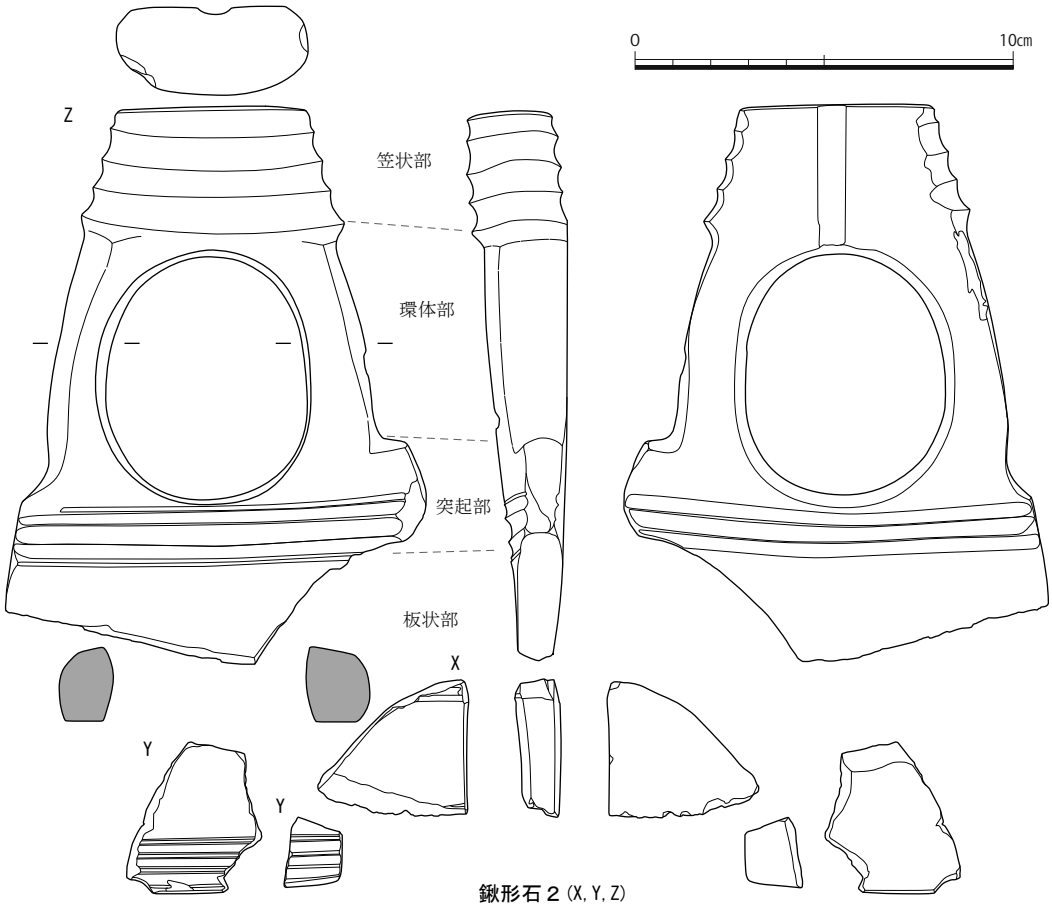
（２）Ａランク資料の報告

①鍬形石（図２）

鍬形石１　　京都大学総合博物館所蔵資料と山城郷土資料館所蔵資料とが接合関係にあり、接合後の全長は 17.1㎝、残存最大幅は 8.6㎝（推定最大幅 8.7㎝）に復元されている（鐘方ほか 2018）。笠状部は上端の厚みが 1.5㎝で、断面形は厚みのある蒲鉾形を呈する。表面の装飾は匙面２段からなり、山部に線刻が彫られる。一方で裏面は平坦で、表面から連続する線刻が彫られるほか、断面半円形で幅が一定な水管溝表現が縦方向に上端から内孔まで作出される。笠状部と環体部の境界は、表面では高さに差があり斜面で接続する一方で、裏面は段差が作出されず横刻のみで区画される。環体部は断面四角形で、表側の環体頂部（斜面と内面の境界）に平坦面は作出されない。裏面の左右両側には「く」の字状に屈曲する細刻線が彫られる。内孔はほぼ左右対称の卵形と見られる。突起部は通有の鍬形石とは逆の左側に作出され、平行する２条の線刻によって表面のみ環体部や板状部から区画される。突起部は薄く突出も弱いが、断



鍬形石１（X, Y）



鍬形石２（X, Y, Z）

図２　Ａランク資料の鍬形石（S=1/2）

面形は表裏非対称で表面が湾曲して側面に接続するのに対し、裏面と側面の境界は稜線をもつ。板状部は右辺が欠損して不明だが、左辺は比較的直線的である。裏面を下にして資料を置くと環体部下半が平坦で、板状部と笠状部および環体部上半は僅かに反り上がる。材質は淡緑色の軟質石材（Ⅲ群）で気泡を含む。赤色顔料混じりの土が各部位に付着している。

鍬形石２　　３館所蔵の鍬形石片がそれぞれ接合関係にあり、接合後の全長は 18.0㎝、残存最大幅は 10.7㎝（推定最大幅 11.3㎝）に復元されている（鐘方ほか 2018）。笠状部は上端の厚みが 2.7㎝で、断面形は厚みのある隅丸の蒲鉾形である。表面の装飾は匙面４段からなり、線刻はない。裏面は平坦で匙面・線刻をもたず、断面半円形で幅が一定な水管溝表現が縦方向に上端から内孔まで作出される。笠状部と環体部の境界は、表面では高さに差があり斜面で接続する一方で、裏面は段差や線刻が作出されず一切の区画表示がない。環体部は四角形断面だが、側面は湾曲してふくらみ、斜面との境界は明確な稜線をもたない。内孔は長径 6.3㎝・短径 5.2㎝の左右対称な卵形である。突起部は嘴状で短く扁平で、表面・裏面とは稜線で画された側面をもつ。板状部上部から突起部にかけて内孔の下端に接するようにして装飾帯が作出され、表面は幅広の凹線帯３条の上下に線刻を配し、裏面は幅広の凹線帯３条のみからなる。板状部は左辺が欠損しているが、右辺は直線的である。板状部下端の表面にも装飾帯が作出され、幅広の凹線帯３条の上下に線刻を配する。また、板状部下端の中央には半円形の抉りをもつ。裏面を下にして資料を置くと笠状部から板状部にかけて緩やかに反るが、湾曲は僅かである。材質は淡緑色の軟質石材（Ⅲ群）で気泡を含む。赤色顔料混じりの土が一部に付着している。

②石釧（図３・４）

石釧１　　５片が接合され、環体の約 8/9 が残存する。外径 8.0㎝、高さ 2.0㎝、最小内孔径 6.3㎝で、デザインは斜面に陰刻の櫛歯状装飾を、側面に匙面を１段配する。頂部は加工面をもたず、区画横刻は斜面と側面の屈曲部から上方へ逸脱して縦刻と交差する。内面に穿孔痕は見られず、内孔最小径は中位よりやや上にきて上下に湾曲して広がる。石材は葉理構造が不明瞭ながら見られ、やや青みがかった色調を呈する（Ⅳ群）。赤色顔料混じりの土が厚く付着する。

石釧２　　６片が接合され、頂部が一部欠損するものの環体すべてが残存する。外径 7.4㎝、高さ 2.0㎝、最小内孔径 5.2㎝である。デザインは斜面に陰刻の櫛歯状装飾、側面に匙面を２段配する。頂部には加工された平坦面をもち、区画横刻は屈曲部に彫られる。内面に穿孔痕は見られず、内孔最小径は中位よりやや上にきて上下に湾曲して広がる。石材は淡緑色の軟質石材で、黒色粒を含む（Ⅲ群）。側面と底面を中心に赤色顔料が付着する。

石釧３　　山城郷土資料館が所蔵する５片と京都大学総合博物館が所蔵する１片が接合し[4)]、合わせて環体すべてが残存する。外径 7.8㎝、高さ 2.0㎝、最小内孔径 5.6㎝で、デザインは斜面に陰刻の櫛歯状装飾を、側面に匙面を１段配する。頂部には幅が狭いが加工された平坦面をもち、区画横刻は屈曲部に彫られる。内面に穿孔痕は見られず、内孔最小径はほぼ上端にきて下へ湾曲して広がる。石材は葉理構造が発達し、やや青みがかった色調を呈する（Ⅳ群）。側面・内面・底面に赤色顔料の付着が濃く見られる。

石釧４　　５片が接合され、頂部が一部欠損するものの環体すべてが残存する。外径 8.0㎝、高さ 2.3㎝、最小内孔径 6.1㎝で、デザインは斜面に陰刻の櫛歯状装飾を、側面に匙面を１段配する。頂部は加工面をもたず、区画横刻は多くの区間で屈曲部に彫られるが、一部区間で上

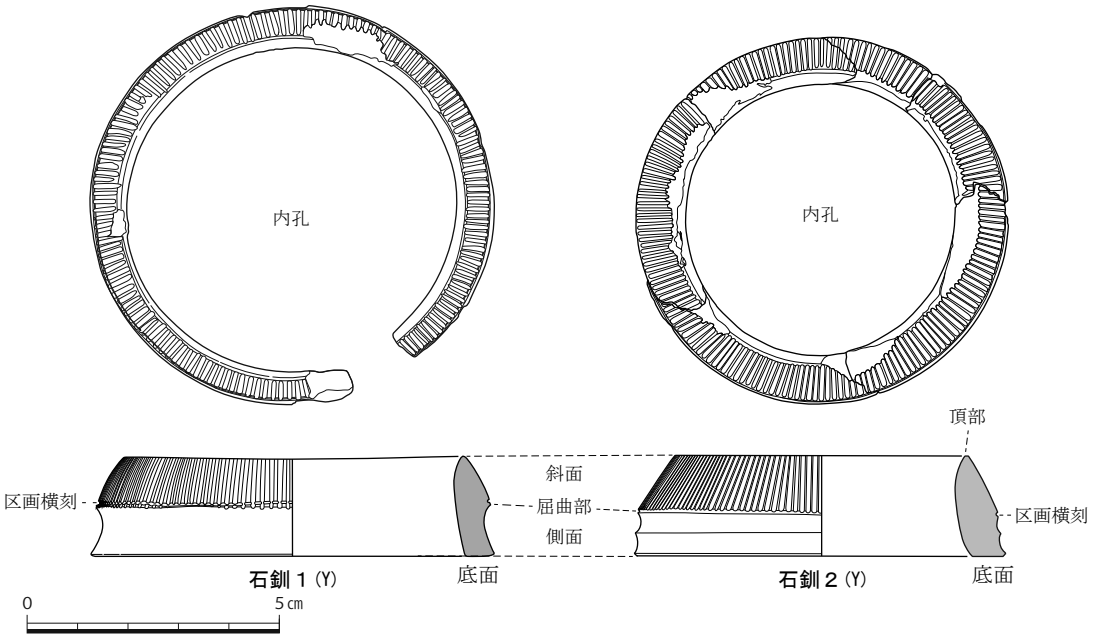


図３　Ａランク資料の石釧１（S=2/3）

方へ逸脱する。内面に穿孔痕は見られず、内孔最小径は中位よりやや上にきて上下に湾曲して広がる。石材は葉理構造が発達し、やや青みがかった色調を呈する（Ⅳ群）。下半部を中心に赤色顔料が付着する。

石釧５　環体の約 1/6 が残存する 1 片で、復元外径約 7.0㎝、高さ 1.7㎝、復元最小内孔径約 5.6㎝である。デザインは斜面に陰刻の櫛歯状装飾、側面に匙面を 1 段配する。頂部には幅が狭いが加工された平坦面をもち、区画横刻は彫られない。内面に穿孔痕は見られず、内孔最小径は上位にきて上へ少し、下へ大きく湾曲して広がる。石材は葉理構造が発達し、やや青みがかった色調を呈する（Ⅳ群）。赤色顔料は薄めに付着する。

石釧６　環体の約 1/6 が残存する 1 片で、復元外径約 7.6㎝、高さ 1.8㎝、復元最小内孔径約 6.0㎝である。デザインは斜面に陰刻の櫛歯状装飾、側面に匙面を２段配する。頂部は風化が進むが幅が狭く加工は施されなかったと見られ、区画横刻は彫られない。内面に穿孔痕は見られず、内孔最小径は中位よりやや上にきて上下に湾曲して広がる。材質は淡緑色の軟質石材である（Ⅲ群）。側面を中心に赤色顔料が付着する。

石釧７　山城郷土資料館所蔵の 1 片と京都大学総合博物館所蔵の 1 片が接合し、合わせて環体の約 1/4 が残存する。復元外径約 7.4㎝、高さ 1.6㎝、復元最小内孔径約 5.6㎝で、斜面に陰刻の櫛歯状装飾、側面に匙面を２段配する。頂部に加工された平坦面をもち、区画横刻は彫られない。内面に穿孔痕は見られず、内孔最小径はほぼ上端にきて下へ湾曲して広がる。材質は淡緑色の軟質石材で（Ⅲ群）、灰色の粒を含む。赤色顔料が斜面・側面・底面に付着する。

石釧８　接合しないが同一個体と考えられる２片を合わせ環体の約 1/3 が残存し、復元外径約 7.4㎝、高さ 1.8㎝、復元最小内孔径約 4.9㎝である。デザインは斜面に陰刻の櫛歯状装飾、側面に匙面を 1 段配し、斜面には匙面２条からなる装飾帯が少なくとも２箇所ある。頂部は風化が進むが、幅が広く平坦面が作出されていたと見られる。区画横刻は彫られない。内面に穿孔痕は見られず、内孔最小径はほぼ上端にきて下へ湾曲して広がる。材質は淡緑色の軟質石材

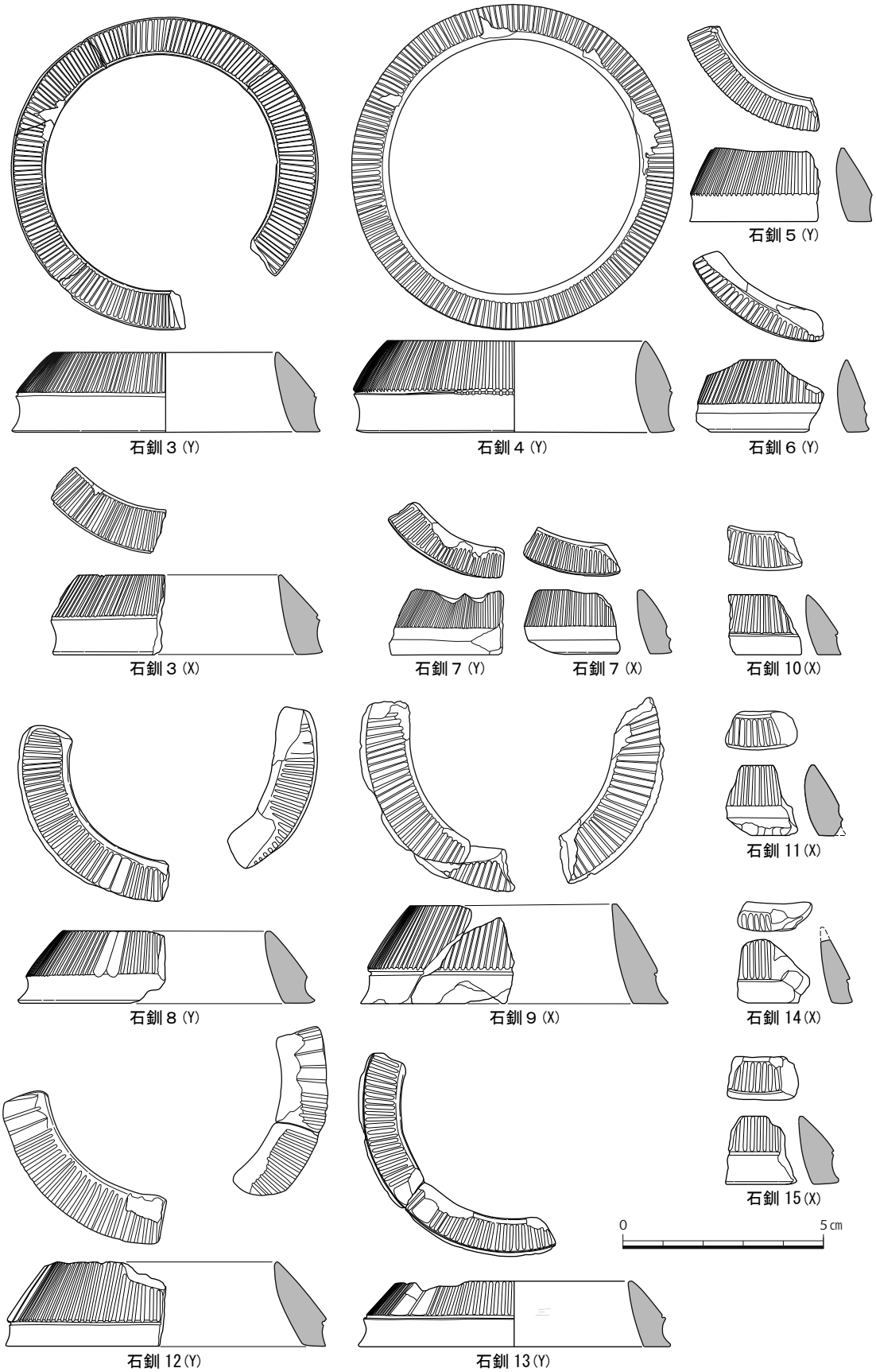


図４　Ａランク資料の石釧２（S=2/3）

で、黒色粒を含む（Ⅲ群）。赤色顔料混じりの土が付着するが、直接塗布されていない。

石釧９　接合する２片と不接合の１片が残存し、合わせて環体の約 1/3 が残存する。復元外径約 7.7㎝、高さ 2.5㎝、復元最小内孔径約 5.0㎝で、斜面に陰刻の櫛歯状装飾、側面に匙面を１段配する。頂部に加工された平坦面をもち、区画横刻は屈曲部から下方へ逸脱する。内面に穿孔痕は見られず、内孔最小径はほぼ上端にきて下へ湾曲して広がる。材質は淡緑色の軟質石材で（Ⅲ群）、風化により気泡が目立つ。赤色顔料は目立たず、僅かに付着する程度である。

石釧 10　環体の約 1/12 が残存する小片で、法量の正確な復元はできないが外径約 7㎝、内径約 5㎝と見られ、高さ 1.5㎝である。斜面に陰刻の櫛歯状装飾、側面に匙面を１段配する。頂部は加工面をもたず、区画横刻は屈曲部から下方へ逸脱する。内面に穿孔痕は見られず、内孔最小径はほぼ上端にきて下へ湾曲して広がる。材質は淡緑色の軟質石材で（Ⅲ群）、風化により気泡が目立つ。赤色顔料の付着はほとんど見られない。

石釧 11　環体の 1/12 未満しか残存せず、径の復元は困難である。高さは 1.8㎝で、斜面に陰刻の櫛歯状装飾、側面に匙面を２段配する。頂部は風化しているが加工された平坦面をもち、区画横刻は彫られない。内面に穿孔痕は見られず、内孔最小径は中位よりやや上にきて上下に湾曲して広がる。材質は淡緑色の軟質石材で（Ⅲ群）、赤色顔料は内面に僅かに付着する。

石釧 12　接合する２片と不接合の１片を合わせて環体の約 1/3 が残存する。復元外径約 8.0㎝、高さ 2.1㎝、復元最小内孔径 5.4㎝で、デザインは斜面に陰刻の櫛歯状装飾を、側面に匙面を１段配する。また、斜面を区画する折面２条からなる装飾帯が２箇所に見られ、山部と谷部は縦刻が彫られる。頂部は風化が進むが加工は施されなかったと見られる。区画横刻は屈曲部から下方へ逸脱する。内面に穿孔痕は見られず、内孔最小径はほぼ上端にきて下へ湾曲して広がる。材質は淡緑色の軟質石材で（Ⅲ群）、白色粒を含む。赤色顔料は僅かに付着する。

石釧 13　２片が接合され、環体の約 1/3 が残存する。復元外径約 7.8㎝、高さ 1.7㎝、復元最小内孔径約 5.6㎝で、デザインは斜面に陰刻の櫛歯状装飾を、側面に匙面を１段配する。また、斜面を区画する匙面２条からなる装飾帯が少なくとも１箇所見られ、山部は縦刻が彫られる。頂部は風化が進み不整形であるが、幅があり加工が施されたと見られる。区画横刻は屈曲部から僅かに上方に逸脱する。内面に横方向の擦痕が僅かに見られるが、穿孔痕であるとは断定できない。内孔最小径は上端にきて下へ湾曲して広がる。材質は淡緑色の軟質石材で（Ⅲ群）、白色粒を含む。赤色顔料は側面を中心に濃く付着する。

石釧 14　環体の 1/12 未満しか残存せず、径の復元は困難である。残存高は 1.5㎝で、斜面に陰刻の櫛歯状装飾、側面に匙面を１段配する。欠損のため頂部の状況は不明で、区画横刻は屈曲部から下方へ逸脱する。内面に穿孔痕は見られず、内孔最小径は残存部の上端にきて下へ湾曲して広がる。材質は淡緑色の軟質石材で（Ⅲ群）、赤色顔料が混じる土が少し付着する。

石釧 15　同一個体と考えられる不接合の２片を合わせ環体の約 1/12 が残存し、正確な復元はできないが外径約 8㎝、内径約 6㎝で、高さは 1.7㎝ある。デザインは斜面に陰刻の櫛歯状装飾、側面に匙面を１段配し、頂部は風化が進むが幅が広く平坦面を持っていたらしい。区画横刻は屈曲部に彫られる。内面に穿孔痕は見られず、内孔最小径は上端にきて下へ湾曲して広がる。材質は淡緑色の軟質石材で（Ⅲ群）、赤色顔料は斜面・側面を中心に濃く付着する。

③紡錘車形石製品（図５）

紡錘車形石製品１　　完形で、外径 5.4㎝、高さ 1.0㎝である。段形状は頂部を含め３段の階段状で、稜線が明瞭である。下段上面は凸状にふくらみ、幅が他段より著しく広い。孔は中心から僅かにずれ、径は上側 0.55㎝、下側 0.4㎝で、下側が小さく孔の周囲が剥離するため、上側からの片面穿孔と考えられる。底面は中心部がほぼ平坦で、外側は僅かに湾曲して外周は僅かに浮く。材質は、暗緑色で流理のある硬質石材で（Ⅰ群）、赤色顔料はほとんど付着しない。

紡錘車形石製品２　　完形で、外径 5.3㎝、高さ 1.2㎝である。段形状は２段の匙面状だが傾斜の緩急変換点が明瞭で、階段状に近い。また、下段の幅と高さが他段より著しく大きい。孔は中心からややずれ、径は上側 0.6㎝、下側 0.5㎝で、下側が小さく孔の周囲が剥離するため上側から片面穿孔されたと考えられる。底面は緩やかに凸面状をなし、外周は僅かに浮く。材質は、濃緑色で流理のある硬質石材で（Ⅰ群）、段を中心に赤色顔料が付着する。

紡錘車形石製品３　　完形で、外径 4.1㎝、高さ 1.1㎝である。段形状は３段の滑らかな匙面状で、各段の幅と高さの差は少ない。孔はほぼ中心に穿孔され、径は上下とも 0.25㎝である。両側とも剥離はなく、両面穿孔された可能性がある。底面は平坦だが外周部は屈曲して反り上がり、段の匙面にそのまま接続するため、側面をもたない。材質は淡緑色の軟質石材で（Ⅲ群）、風化が激しく段の稜線は消えかかっている。赤色顔料の付着は見られない。

紡錘車形石製品４　　一部欠損し、外径 4.4㎝、高さ 1.1㎝である。段形状は２段の滑らかな匙面状で、上段の幅が下段より僅かに広い。孔はほぼ中心に穿孔され、径は上側 0.4㎝、下側 0.35㎝で、周囲は上下ともに漏斗状の凹みが研磨によって作出される（穿孔方向は不明）。底面は平坦だが、外周部は屈曲して反り上がる。材質は淡緑色の軟質石材で（Ⅲ群）、微細な灰色の粒を含む。風化が激しく段の稜線は消えかかっており、赤色顔料の付着は見られない。

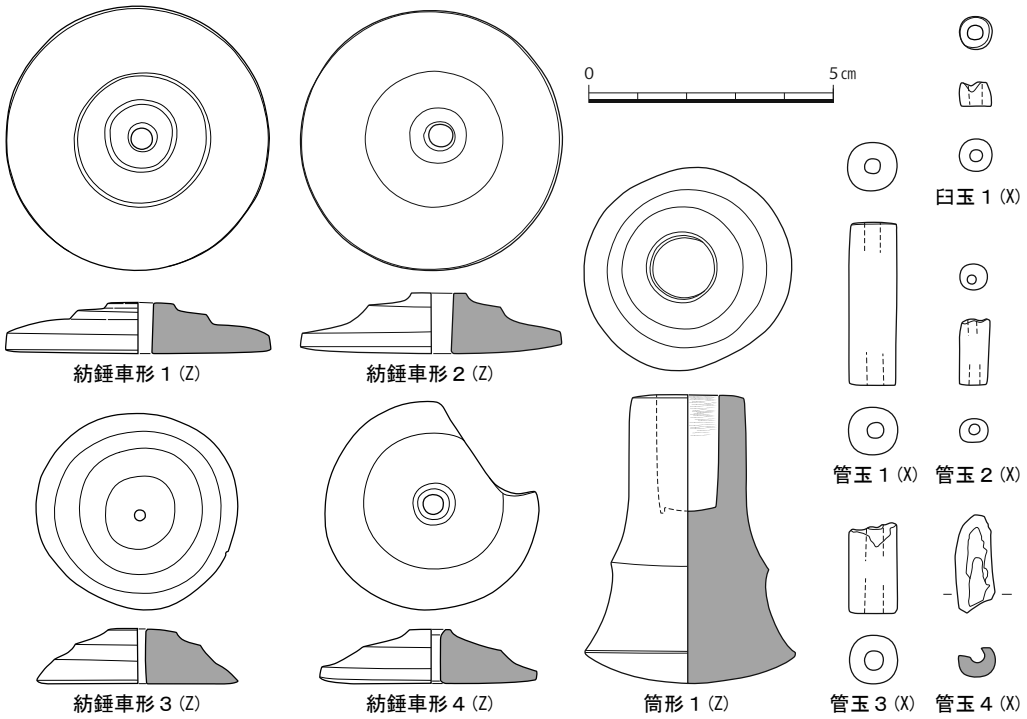


図５　Ａランク資料の紡錘車形石製品・筒形石製品（S=2/3）、玉類（S=1/1）

④筒形石製品１（図５）　完形で、上面径 2.3㎝、底面径 4.3㎝、高さ 5.9㎝である。側面を稜線が１周し、その上下は匙面状の曲面となる。底面は丸底で、中心のみ接地して外周は 0.6㎝浮く。内孔は貫通せず、孔径は 1.3㎝、深さ 2.4㎝で、内孔壁には水平方向に細かく連続する穿孔痕が、内孔底には周りを縁取るように巡る刃痕が観察されることから、回転を用いて穿孔されたことが分かる。材質は淡緑色の地に濃緑色の粒が多量に入る硬質石材である（Ⅱ群）。側面や底面に赤色顔料の付着はほとんど見られないが、内孔壁には濃く付着している。

⑤玉類（図５）　管玉は１点が完形、残り３点は破片資料で、いずれも淡緑色の軟質石材である（Ⅲ群）。管玉１は完形品で直径 0.65㎝、長さ 2.2㎝、孔径は両側とも 0.2cm で、端面に片面穿孔に伴う割れ円錐や剥離は見られないため、両面穿孔と考えられる。管玉２は片方の端面のみ残存する資料で、直径 0.65㎝である。管玉３も片方の端面のみが残存し、１・２に比して直径が小さく幅 0.4㎝、厚み 0.3㎝でやや扁平である。管玉４は端面が残存せず孔壁が露出する破片で、両面からの穿孔が僅かにずれて生じた段が確認される。臼玉１は滑石製で、直径 0.5㎝、残存高 0.3㎝である。残りが比較的良い管玉１・３には赤色顔料の付着が見られる。

（３）Ａランク資料の評価（表１）

鍬形石は、櫻井により２点とも傍系Ⅱ式に分類され、櫻井の編年で３期に位置づけられる（櫻井 1991）。また北條は、両者を第１群・第２群の二大別のうち、「材質の厚さや断面の形状については第１群の特徴をもちながらも、各部の表現手法や裏表の処理状況は明らかに第２群のそれである」両群の「折衷的資料」と評価し、うち１点（鍬形石２）を第４段階に置く（北條 1994）。２点とも裏面は笠状部と環体部間の段差が作出されず、線刻のみで区画されたり、線刻もなく区画されなかったりするなど、前期後葉後半以降に見られる新しい特徴を示す。

石釧は、いずれの資料も斜面に櫛歯状表現、側面に匙面を１段か２段配するデザインをもつ。製作技術については、回転を利用した穿孔後に内面の調整を加えない穿孔Ａ技法の資料が見られず、回転穿孔後に下側から研磨調整するＢ技法や、回転を利用せずに打割によって穿孔するＣ技法が用いられている[5)]。筆者の分類では B-Ks/Kss 系（2-4 式）、C-Ks/Kss 系（2-3 式）の資料が見られ、組合せは段階Ⅵに位置づけられる（二村 2022）。石材は軟質で淡緑色のⅢ群と葉理構造が発達するⅣ群が採用され、前者にはＢ技法、後者にはＣ技法がよく対応する。

紡錘車形石製品は、西島庸介の分類・編年で示された形態・材質的特徴と照合させると、硬質石材製で各段の不等分割が特徴的な第２段階の資料（紡錘車形１・２）と、軟質石材製で各段の高さ・幅の等分化が進む第３段階の資料（紡錘車形３）が含まれる（西島 2008）。

管玉は、大賀克彦の系統区分で北陸西部系を構成する資料と考えられ、完形品（管玉１）の法量は前期後葉から末葉に位置づけられる領域Ｆに含まれる（大賀 2013）。

以上に示した各器種の編年的位置づけを踏まえると、主として鍬形石と石釧の評価から、Ａランク資料は前期後葉後半の組合せであると評価できる。管玉と紡錘車形石製品は前期後葉から末葉の中に位置づけられ、滑石製臼玉も前期後葉に出現するため矛盾せず、有稜・丸底の筒形石製品の所属時期としても問題はない。大賀による古墳時代の時期区分（大賀 2002）では前Ⅵ期に該当し、三角縁神獣鏡Ⅴ期（岩本 2020）や倭製鏡Ⅳ段階（下垣 2003）等と併行し、円筒埴輪はⅡ期古相（廣瀬 2015）の資料と対応関係にある。

５．Ｂランクの資料の抽出と評価

（１）Ｂランク資料の抽出

①鍬形石（図６- １～４、図７- ４）　興戸２号墳における鍬形石の盗掘点数は、供述によって数が一致しない。しかし、西山６号墳の盗掘点数は２～３点で一致し、鐘方らはこれらを差し引いた８～９点と想定している。また、興戸２号墳の資料の「表面に土壌が付着して一部の欠損や表面の傷が目立」ち、「表面に朱や粘土の付着が顕著に認められる」傾向を指摘している（鐘方ほか 2018）。Ａランク資料にも赤色顔料の付着は広く認められ、その有無はＢランク資料を抽出する上で一定の目安になると考えられる。「北和城南古墳出土品」のＡランクを除く８点の中では、５点は赤色顔料が顕著に付着し、２点はごく僅かに付着し、１点は皆無である。本稿では、付着の顕著な５点をＢランクとして、付着が僅かな２点をＣランク、付着が見られない１点をＤランクとする。

②車輪石・石釧（図６- ５～７、図７）　車輪石と石釧は形状が類似する資料があり、識別基準は研究者によっても異なる。したがって、供述された盗掘点数は両者が混同されていると考えるべきである。興戸２号墳の盗掘点数は、「菊ノ輪ノ様ナ物」（＝車輪石？）３～５点と石釧 10 ～ 20 個で供述により幅があるが（鐘方ほか 2018）、両器種を合わせて 10 数点～ 20 数点が盗掘されたと想定される。

「北和城南古墳出土品」における赤色顔料の付着状況を参照すると、顕著な付着は車輪石 17 点中９点、石釧 27 点中 22 点に見られる。このうち、車輪石６点は赤色顔料の付着部位が環体の片側に偏る。中でも３点は円形もしくは隅丸方形の点対称な外形を呈し、裏表に斜面をもつ点、肋条表現の山部・谷部のうち谷部のみ線刻が彫られる点、材質にⅣ群石材が用いられる点が一致し、うち２点は側面に沈線が１周彫られることも共通する。この３点は湾曲する内面形状から穿孔技法の共通性も示唆され（Ｃ技法）、生産から流通を経て使用（副葬）に至るすべてのライフ・ヒストリーを共にした可能性が高い。赤色顔料の付着状況が特徴的な資料の中に、近しい生産状況が想定される資料が集中する状況に鑑みて、これら６点をＢランクとする。また、赤色顔料が付着する石釧の中で 11 点は資料の底面や側面などの下半部に集中して付着する状況が顕著で、同一の副葬状況におかれていた可能性を指摘できるため、これらの資料をＢランクに評価する。車輪石と石釧の残りの資料は赤色顔料が付着するものをＣランク資料、付着が見られないものをＤランク資料とする[6)]。

（２）Ｂランク資料の評価（表１）

鍬形石は櫻井の分類で傍系Ⅱ式・直系Ⅲ式を含む２～３期の組合せである（櫻井 1991）。また、北條の分類では第２群第４段階の資料を含み、Ａランク資料と同様に前期後葉後半に位置づけられる（北條 1994）。車輪石は三浦俊明による編年で第Ⅱ段階の資料と第Ⅲ段階の資料を含む（三浦 2005）。上げ底をもたず底面が接地する第Ⅳ段階の資料が含まれないため、製作時期は概ね前期後葉前半に求められる[7)]。石釧はⅣ群石材を選好するＣ技法を用いた資料が大半を占め、組合せは段階Ⅴ以降に位置づけられる（二村 2022）。Ａランク資料にあった穿孔Ｂ技法を用いる資料（Ｂ系群）は確認されず、Ａランク資料よりもデザインのヴァリエーションに富み、斜面に車輪石に似た肋条表現をもつ資料や、側面に折面を１段配するものが見

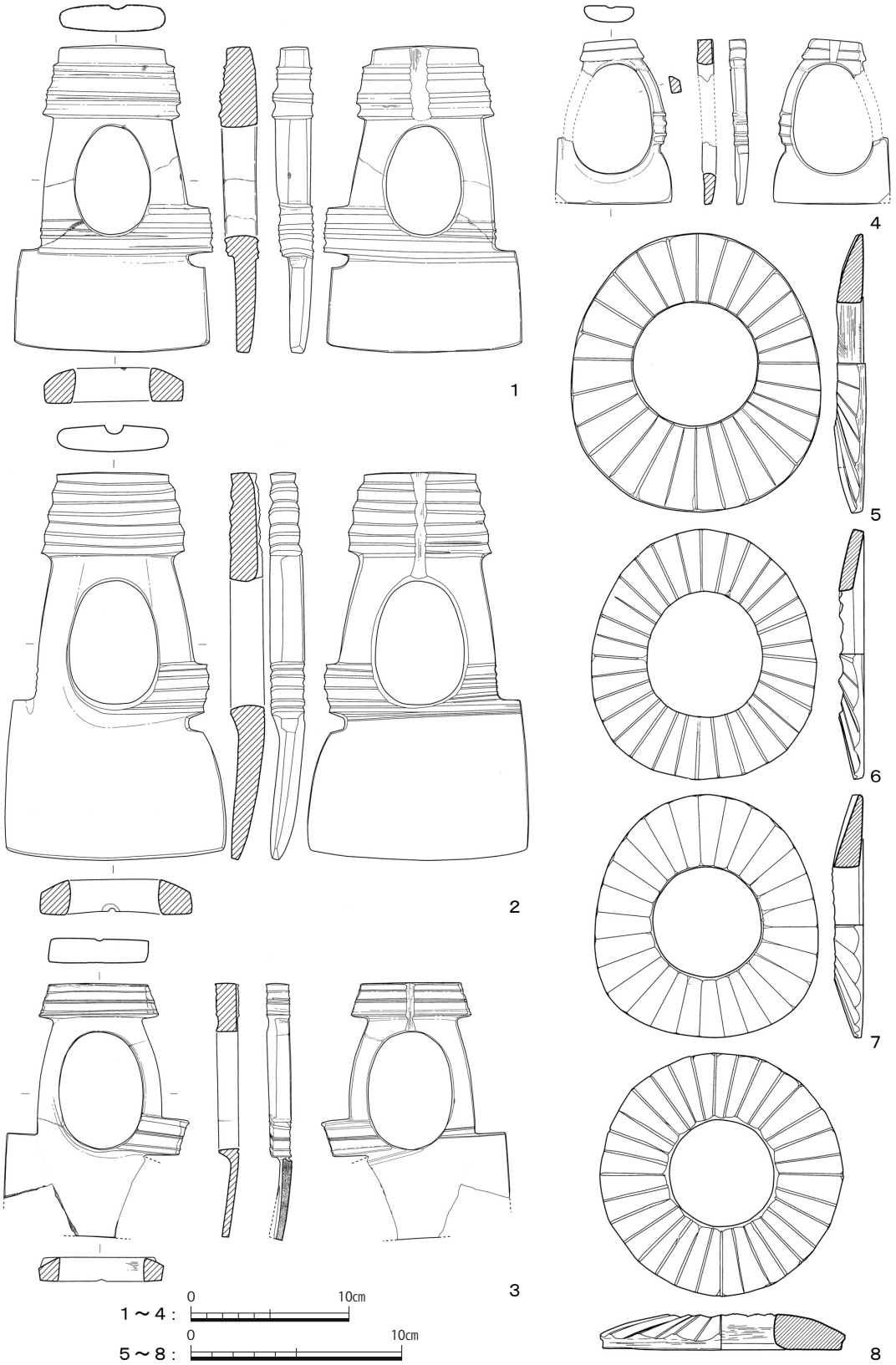


図６　「北和城南古墳出土品」のＢランク資料１（鍬形石：S=1/4、車輪石：S=1/3）

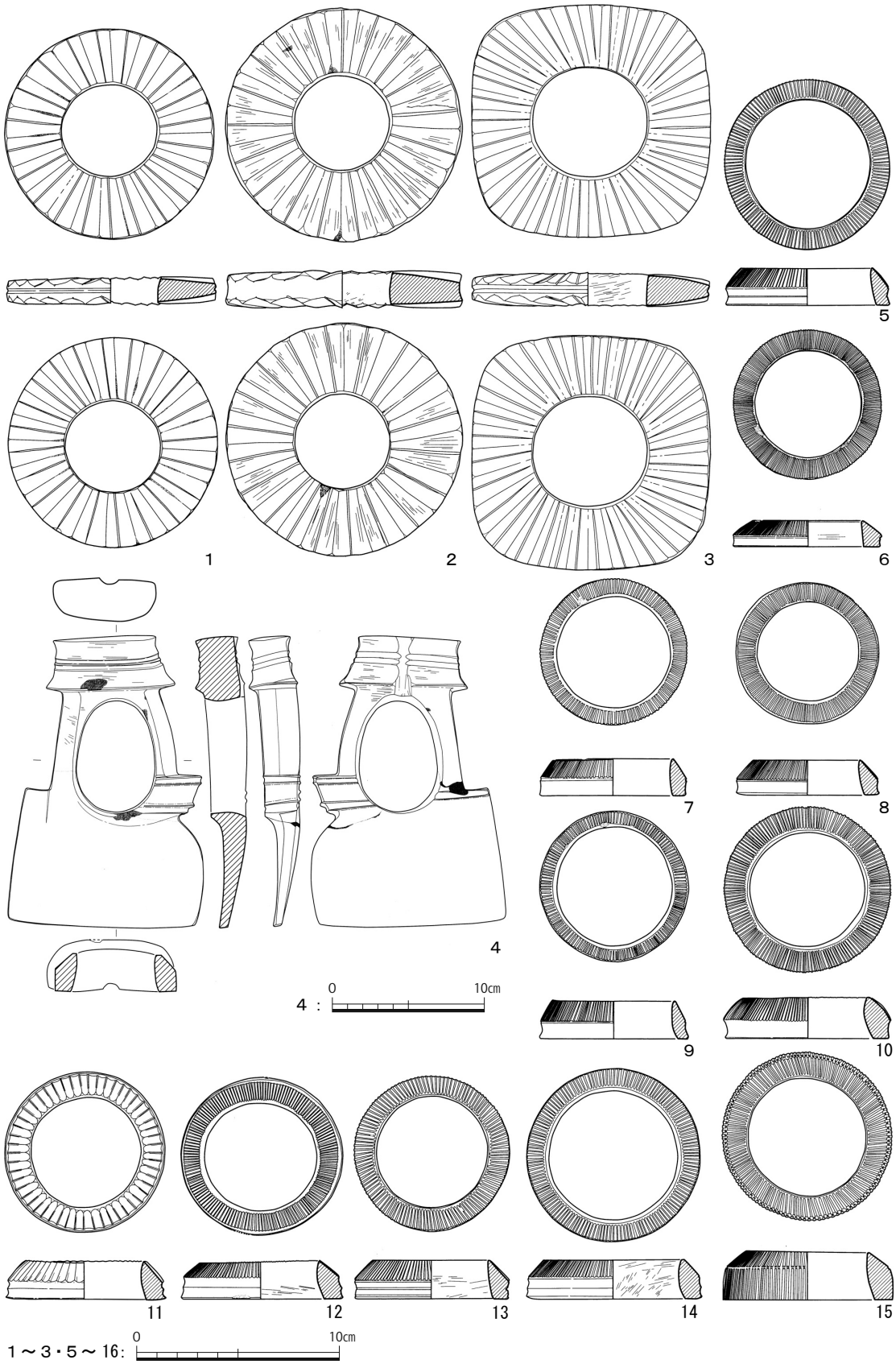


図７　「北和城南古墳出土品」のＢランク資料２（鍬形石：S=1/4、車輪石・石釧：S=1/3）

られる。

以上の状況からＢランク資料は、鍬形石と石釧が前期後葉後半の組合せで、車輪石も前期後葉の資料と評価されることから、両ランクの資料は概ね同時期の所産であると結論づけられる。組成から見ると、鍬形石では櫻井分類の傍系突起式（櫻井 1991）、もしくは北條分類の第２群（北條 1994）が主体的な位置を占める点で共通し、装飾表現や形態からみた系統上の偏りがある。車輪石と石釧は内面が直線的な断面形を呈する穿孔Ａ技法が用いられた資料が非常に少ないという点で一致するが[8)]、穿孔Ｂ技法が用いられた資料の多寡については差異が見られる。

６．おわりに―興戸２号墳の石製品の位置づけと評価―

ＡランクとＢランクを合わせた興戸２号墳の石製品は、鍬形石７点、車輪石６点、石釧 26 点、筒形石製品１点、紡錘車形石製品４点、玉類５点であり、時期は組合せとして前期後葉後半に位置づけられる。本墳に副葬された腕輪形石製品の組成からは全体として製作技術や使用石材、形態的特徴や装飾表現に多様性が看取され、複数の製作地に由来する資料が混在していると考えられる。この状況は、本墳に副葬された石製品が特定の製作地への直接的なアクセスによって入手されたのではなく、複数の製作地からもたらされた石製品が集積された後で流通した結果であることを示唆する。一方で、製作の局面で付加された属性のまとまる各資料群が組成の中で占める割合は均等ではなく、鍬形石では形態的特徴や装飾表現に、車輪石と石釧においては製作技術のヴァリエーションに偏りが見られる。組成の偏りは、興戸２号墳に副葬された石製品の流通経路や、流通に関与した集団もしくは個人間の諸関係を反映している可能性がある。

興戸２号墳の石製品と同じ器種を含む組合せは、奈良県新沢 500 号墳・大阪府和泉黄金塚古墳・三重県石山古墳で確認される。この３例は前期後葉後半から前期末葉に築造された前方後円墳で、複数の埋葬／埋納施設に分けて副葬される。興戸２号墳は上記３例と異なり小規模円墳に多様な器種が単一の埋葬施設に副葬された稀有な事例として特筆される。また、腕輪形３器種を副葬する小規模円墳では、興戸２号墳と同時期に築造された奈良県上殿古墳や徳島県巽山古墳が挙げられ、京都府西山６号墳も３器種が副葬された可能性が高いが、興戸２号墳ほどの多量性は認められない。

以上の検討より興戸２号墳の石製品は、組成の観点では複数の製作地で生産された資料が混在し、かつ内訳の偏りが認められるという特徴が指摘できる。また器種構成と点数の面では、前期後葉後半から見られる小規模円墳への多器種副葬例かつ類例の見られない多量副葬例であると評価される。

今後は稿を改めて、南山城地域の他の出土例を時間軸・空間軸上に整理して、生産の局面に由来する資料群の組成や器種構成・点数の観点から比較検討する。さらに、各出土例における墳丘の形態や規模、他の副葬器物の様相と対照させることで、本地域における石製品の流通・使用とその特質を具体的に復元する。興戸２号墳に多種多量な石製品が副葬された背景についても、南山城地域における石製品の流通・使用状況の中に位置づけることで浮き彫りにする。

註

1）石製品では寶田安治郎が購入した鍬形石２点が裁判後に返却されており、盗掘された鍬形石の総数は「北和城南古墳出土品」の９点と合わせて 11 点となる（鐘方ほか 2018）。

2）本稿の時期区分と大賀克彦による古墳時代の時期区分（大賀 2002）との対応関係を示すと、前期中葉＝前Ⅳ期、前期後葉前半＝前Ⅴ期、前期後葉後半＝前Ⅵ期、前期末葉＝前Ⅶ期となる。

3）石材は岡寺の目視分類（岡寺 1999）に修正を加え、色調と硬軟の差によって以下のⅠ～Ⅳ群に大別する。

Ⅰ群：濃緑～暗緑色の硬質石材で、しばしば「碧玉」と称される。比重が大きく、2.5 ～ 2.8 前後である。

Ⅱ群：淡緑色の硬質石材で、比重にばらつきがあり（2.2 ～ 2.7 前後）、将来的な細分を要する。

Ⅲ群：淡緑色で軟質の緑色凝灰岩で、比重が小さい（1.4 ～ 1.8 前後）。硬質石材が風化により内部まで軟質化した場合もⅢ群に含めて分類する。

Ⅳ群：層状の葉理構造が発達する緑色凝灰岩で、比較的比重が大きい（1.9 ～ 2.1 前後）。

4）石釧３と石釧７の接合関係については、山城郷土資料館の細川康晴氏よりご教示を得た。ここに記して感謝の意を表す。両資料の接合関係は、水野による三次元計測によって検証されている（水野 2021）。

5）穿孔技法は内面の形状によって判断し、直線的な内面を呈してしばしば回転穿孔痕を残すＡ技法、下側からの研磨によって内面下方に向かって湾曲して広がるＢ技法、打割による穿孔後に上下から研磨するため内孔最小径が中位からやや上位にきて上下に湾曲して広がるＣ技法を識別する（二村 2022）。

6）特異な彫刻文が特徴的な滑石製石釧は線刻部分に満遍なく赤色顔料が付着するため、本稿の基準ではＣランクとなる。また、Ａランク資料の管玉（図５）と同じ軟質石材製の資料を含む「北和城南古墳出土品」中の管玉 24 点（裁６）は、興戸２号墳から盗掘された可能性が言及されているが（鐘方ほか 2018）、尼塚４号墳でも軟質石材製の管玉が出土しており（堤・高橋編 1969）、本稿ではＢランクに含めない。

7）Ｃランク資料の１点（図 6-8）は内面との境界部分を除き上げ底が作出されず、底面のほとんどが接地する。この資料が興戸２号墳のものであれば、車輪石の所属時期も前期後葉後半に下る可能性がある。

8）Ｄランク資料の石釧に穿孔Ａ技法によって製作された資料が多く含まれることは、西山６号墳もしくは尼塚４号墳に副葬された石釧群における組成上の特徴を反映している可能性がある。このうち、尼塚４号墳は 1968（昭和 43）年に行われた発掘調査の際に後円部粘土槨の棺内全面に赤色顔料が検出されているため（堤・高橋編 1969）、副葬された石製品に赤色顔料が付着しなかったとは考え難い。残る西山６号墳は調査されることなく取り壊されており埋葬施設の状況を確認できないことが惜しまれるが、Ｄランク資料の帰属先の最有力候補となる。

謝辞

本稿の執筆にあたり、下記の諸氏・諸機関から資料調査のための格段のご高配を賜った。ここに記して謝意を表す (五十音順・敬称略)。坂川幸祐　下垣仁志　中川あや　細川康晴　村上由美子　吉澤悟　京都大学総合博物館　京都府立山城郷土資料館　奈良国立博物館

参考文献

井口喜晴 2004「北和城南古墳出土品（奈良国立博物館蔵）」『鹿園雑集』第６号　奈良国立博物館

岩戸晶子・中川あや・鐘方正樹・岩本　崇・髙木清生・村瀬　陸・北山峰生・大野壽子・南部裕樹 2017『北和城南古墳出土品調査報告書』奈良国立博物館

岩本　崇 2020『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房
梅原末治 1955「田邊町興戸の古墳」『京都府文化財調査報告』第 21 冊　京都府教育委員会
大賀克彦 2002「凡例　古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町教育委員会
大賀克彦 2013「玉類」『副葬品の型式と編年』（古墳時代の考古学４）同成社
岡寺　良 1999「石製品研究の新視点―材質・製作技法に着目した視点―」『考古学ジャーナル』No.453　ニューサイエンス社
小田木治太郎 2010「鍬形石の類似品群について―東大寺山古墳出土品から―」『東大寺山古墳の研究』東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館
小野山節・都出比呂志・黒川冨美子編 1968『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第２部　京都大学文学部
鐘方正樹・髙木清生・山上　豊 2018「北和城南古墳出土品の研究―裁判記録に残る皇陵盗掘事件の真相―」『由良大和古代文化研究協会研究紀要』第 22 集　由良大和古代文化研究協会
蒲原宏行 1987「石釧研究序説」『比較考古学試論』雄山閣
蒲原宏行 1991「腕輪形石製品」『古墳時代の研究』第８巻（古墳Ⅱ副葬品）雄山閣
川西宏幸 1981「前期畿内政権論―古墳時代政治史研究―」『史林』第 64 巻第５号　史学研究会
河村好光 2015「製作技術からみた鍬形石の型式と編年」『石川考古学研究会々誌』第 58 号　石川考古学研究会
櫻井久之 1991「鍬形石の系譜と流通」『考古学雑誌』第 77 巻第２号　日本考古学会
下垣仁志 2003「古墳時代前期倭製鏡の編年」『古文化談叢』第 49 集　九州古文化研究会
杉山晋作 1985「特異な彫刻文のある石製腕飾」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学
髙木清生 2021「逆位の鍬形石」『滋賀県立大学考古学研究室論集Ⅰ』滋賀県立大学考古学研究室
堤圭三郎・高橋美久二編 1969『埋蔵文化財発掘調査概報（1969）』京都府教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所編 2005『陵墓等関係文書目録―末永雅雄先生旧蔵資料集―』第１集　（社）橿原考古学協会
西川英弘・鷹野一太郎編 1982『田辺町遺跡分布調査概報』田辺町教育員会
西島庸介 2008「紡錘車形石製品の研究」『静岡県考古学研究』第 40 号　静岡県考古学会
二村真司 2022「石釧の生産と編年」『考古学研究』（掲載号未定）　考古学研究会
久永雅宏 2018「「特異な彫刻文のある」腕輪形石製品の諸問題」『史境』第 76 号　歴史人類学会
廣瀬　覚 2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社
北條芳隆 1994「鍬形石の型式学的研究」『考古学雑誌』第 79 巻第４号　日本考古学会
三浦俊明 2005「車輪石生産の展開」『待兼山考古学論集―都出比呂志先生退任記念』大阪大学考古学研究室
水野敏典 2021『三次元デジタル・アーカイブを活用した青銅器製作技術解明の総合的研究』奈良県立橿原考古学研究所

図版引用元

図１：大日本帝国陸地測量部二万分の一図（地図資料編纂会編 2001「田邊」『正式二万分一地形図集成　関西』柏書房）を筆者改変　図２：鐘方ほか 2018 を実見の上改変・再トレース　図３～図５：筆者実測　図６・７：岩戸ほか 2017、26・27・29・31・32・35 ～ 38・41・45・47 頁　表１：筆者作成　写真１：筆者撮影

表１　興戸２号墳出土または「北和城南古墳出土品」の腕輪形石製品一覧

鍬 形 石

本稿の付番	既報の付番 (1) 梅原 1955 第一八圖 (2) 西川・鷹野編 1982 第 19 図 (3) 岩戸ほか 2017	ランク	所蔵館 X：京大総合博物館 Y：山城郷土資料館 Z：奈良国立博物館	分類		材質	重量（g） （ ）内は破片	裏面の笠状部―環体部間の区画
				櫻井 1991	北條 1994			
図２－鍬形石１	(1)/(2)-11	A	X・Y	傍系Ⅱ式	第２群	Ⅲ	(124.5)	線刻
図２－鍬形石２	(1)/(2)-10/(3) 裁 27	A	X・Y・Z	傍系Ⅱ式	第２群Ｂ類第４段階	Ⅲ	(183.9)	区画なし
図７－４	(3) 裁 24	B	Z	直系Ⅲ式	第１群Ｂ類第４段階	Ⅳ	433.0	段差
図６－１	(3) 裁 25	B	Z	傍系Ⅱ式	第２群Ａ類第４段階	Ⅳ	459.4	段差
図６－２	(3) 裁 26	B	Z	傍系Ⅱ式	第２群Ａ類第４段階	Ⅳ	650.6	線刻
図６－３	(3) 裁 28	B	Z	傍系Ⅰ式	第２群Ａ類第３段階	Ⅳ	(147.6)	段差
図６－４	(3) 裁 29	B	Z	直系Ⅰ式		Ⅲ	(37.5)	線刻
	(3) 裁 21	D	Z		第１群Ｂ類第４段階	Ⅲ	333.8	段差
	(3) 裁 22	C	Z	直系Ⅱ式	第１群Ｂ類第３段階	Ⅳ	234.1	段差
	(3) 裁 23	C	Z	傍系Ⅱ式	第２群Ｂ類第３段階	Ⅲ	233.5	区画なし

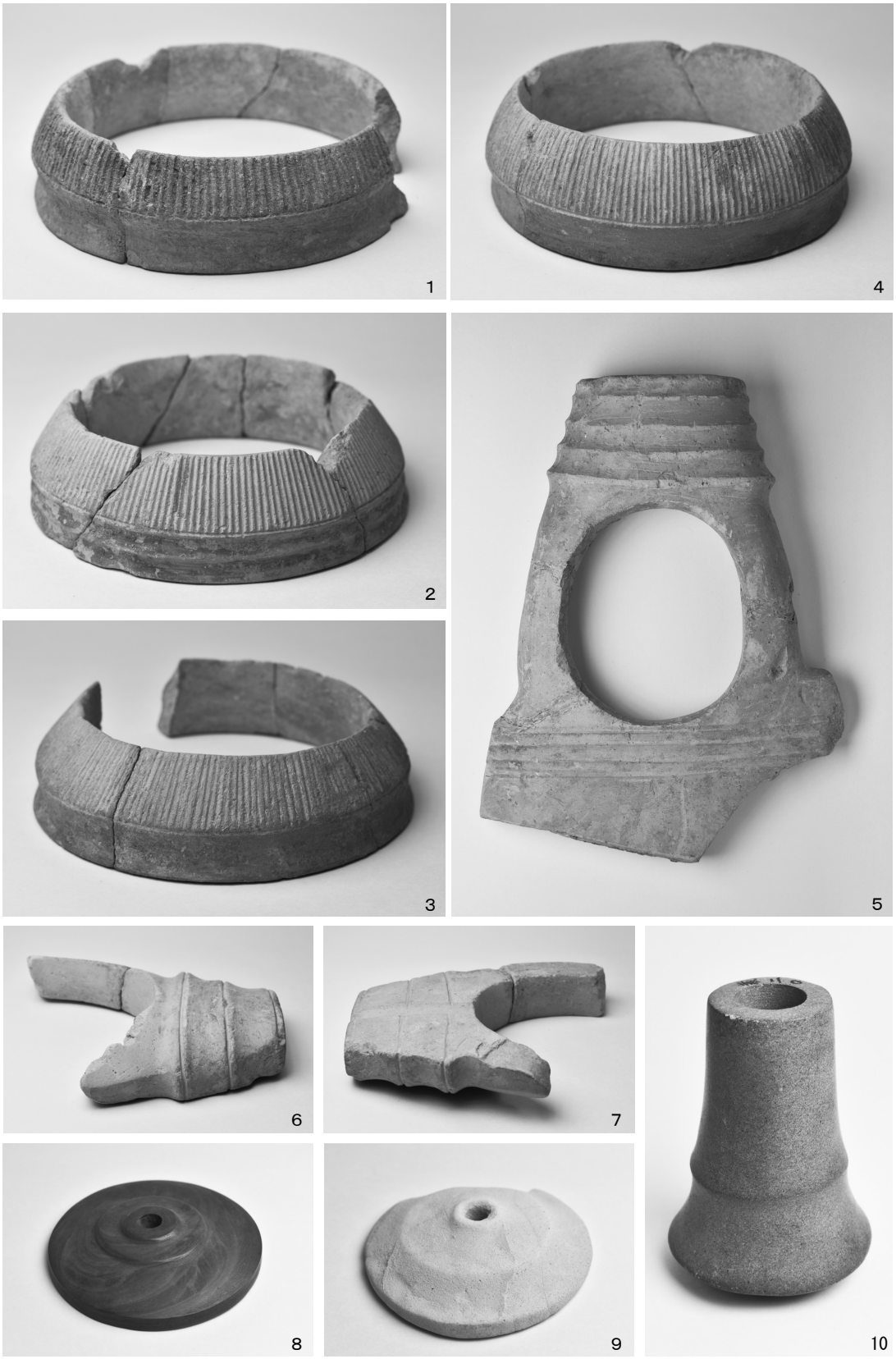
車 輪 石

本稿の付番	既報の付番	ランク	所蔵館	分類	形状	穿孔	線刻	材質	重量（g）	その他属性
				三浦 2005	外形／内孔					
図６－５	(3) 裁 33	B	Z	第３段階	卵形／円形	Ａ技法	山谷	Ⅱ	212.9	
図６－６	(3) 裁 35	B	Z	第２段階	卵形／卵形	Ｂ技法	山谷	Ⅲ	62.6	
図６－７	(3) 裁 36	B	Z	第３段階	卵形／円形	Ｃ技法	なし	Ⅲ	107.5	
図７－１	(3) 裁 43	B	Z		円形／円形	Ｃ技法	谷	Ⅳ	130.4	側面に線刻
図７－２	(3) 裁 44	B	Z		円形／円形	Ｃ技法	谷	Ⅳ	242.9	
図７－３	(3) 裁 45	B	Z		隅丸方形／円形	Ｃ技法	谷	Ⅳ	215.7	側面に線刻
図６－８	(3) 裁 42	C	Z	第３段階	円形／円形	Ｃ技法	山谷	Ⅳ	162.0	
	(3) 裁 30	C	Z	第２段階	卵形／卵形	Ｂ技法	山谷	Ⅲ	34.0	
	(3) 裁 31	D	Z	第３段階	卵形／円形	Ｂ技法	なし	Ⅲ	120.4	
	(3) 裁 32	C	Z	第３段階	卵形／円形	Ａ技法	なし	Ⅲ	196.9	
	(3) 裁 34	C	Z	第３段階	円形／円形	Ｃ技法	なし	Ⅲ	145.9	
	(3) 裁 37	C	Z	第３段階	卵形／円形	Ａ技法	山	Ⅱ	137.2	
	(3) 裁 38	C	Z	第３段階	円形／円形	Ｂ技法	なし	Ⅳ	100.8	
	(3) 裁 39	C	Z	第２段階	円形／円形	Ｂ技法	なし	Ⅲ	83.0	
	(3) 裁 40	C	Z	第３段階	円形／円形	Ｃ技法	なし	Ⅲ	90.5	
	(3) 裁 41	D	Z	第３段階	円形／円形	Ａ技法	山谷	Ⅲ	63.6	
	(3) 裁 47	D	Z	第３段階	円形／円形	Ｂ技法	山	Ⅲ	102.4	斜面線刻は２条ずつ

石 釧

本稿の付番	既報の付番	ランク	所蔵館	穿孔	デザイン		分類	材質	重量（g）	その他属性
					斜面	側面	二村 2022			
石釧１	(2)－1	A	Y	Ｃ技法	櫛歯状	匙面１段	C-Ks3 式	Ⅳ	35.9	
石釧２	(2)－8	A	Y	Ｃ技法	櫛歯状	匙面２段	C-Kss2 式	Ⅲ	28.7	
石釧３	(1)/(2)－4	A	X・Y	Ｂ技法	櫛歯状	匙面１段	B-Ks2 式	Ⅳ	不明	
石釧４	(2)－2	A	Y	Ｃ技法	櫛歯状	匙面１段	C-Ks3 式	Ⅳ	55.9	
石釧５	(2)－6	A	Y	Ｃ技法	櫛歯状	匙面１段	C-Ks2 式	Ⅳ	(6.9)	
石釧６	(2)－9	A	Y	Ｃ技法	櫛歯状	匙面２段	C-Kss3 式	Ⅲ	(3.0)	
石釧７	(1)/(2)－9	A	X・Y	Ｂ技法	櫛歯状	匙面２段	B-Kss4 式	Ⅲ	(3.3)	
石釧８	(2)－7	A	Y	Ｂ技法	櫛歯状	匙面１段	B-Ks3 式	Ⅲ	(11.1)	斜面を区画する装飾帯
石釧９	(1)	A	X	Ｂ技法	櫛歯状	匙面１段	B-Ks3 式	Ⅲ	(19.5)	
石釧 10	(1)	A	X	Ｂ技法	櫛歯状	匙面１段	B-Ks4 式	Ⅲ	(1.3)	
石釧 11	(1)	A	X	Ｃ技法	櫛歯状	匙面２段	C-Kss2 式	Ⅲ	(1.1)	
石釧 12	(2)－3	A	Y	Ｂ技法	櫛歯状	匙面１段	B-Ks4 式	Ⅲ	(12.5)	斜面を区画する装飾帯
石釧 13	(2)－5	A	Y	Ｂ技法	櫛歯状	匙面１段	B-Ks3 式	Ⅲ	(6.4)	斜面を区画する装飾帯
石釧 14		A	X	Ｂ技法	櫛歯状	匙面１段	B-Ks3 ～４式	Ⅲ	(0.8)	
石釧 15	(1)	A	X	Ｂ技法	櫛歯状	匙面１段	B-Ks2 式？	Ⅲ	(1.3)	
図７－５	(3) 裁 51	B	Z	Ｃ技法	櫛歯状	折面１段	C-Ko2 式	Ⅳ	50.4	
図７－６	(3) 裁 52	B	Z	Ａ技法	櫛歯状	匙面１段	A-Ks3 式	Ⅲ	20.1	
図７－７	(3) 裁 53	B	Z	Ｃ技法	櫛歯状	匙面１段	C-Ks2 式	Ⅳ	37.9	
図７－８	(3) 裁 56	B	Z	Ｃ技法	櫛歯状	匙面１段	C-Ks3 式	Ⅳ	39.1	
図７－９	(3) 裁 58	B	Z	Ｃ技法	櫛歯状	匙面１段	C-Ks2 式	Ⅳ	31.5	
図７-10	(3) 裁 59	B	Z	Ｃ技法	櫛歯状	匙面１段	C-Ks2 式	Ⅳ	74.9	
図７-11	(3) 裁 62	B	Z	Ｃ技法	肋条	匙面２段	C-Rss3 式	Ⅳ	60.0	
図７-12	(3) 裁 63	B	Z	Ｃ技法	櫛歯状	匙面２段	C-Kss3 式	Ⅳ	61.5	
図７-13	(3) 裁 65	B	Z	Ｃ技法	櫛歯状	折面１段	C-Ko2 式	Ⅳ	54.5	
図７-14	(3) 裁 68	B	Z	Ｃ技法	櫛歯状	匙面２段	C-Kss2 式	Ⅲ	47.1	
図７-15	(3) 裁 73	B	Z	Ｃ技法	櫛歯状	櫛歯状	C-Kk2 式	Ⅳ	87.7	
	(3) 裁 48	C	Z	Ｃ技法	櫛歯状	匙面１段	C-Ks3 式	Ⅳ	45.5	
	(3) 裁 49	C	Z	Ｃ技法	櫛歯状	匙面１段	C-Ks2 式	Ⅳ	48.3	
	(3) 裁 50	C	Z	Ｂ技法	櫛歯状	匙面１段	B-Ks2 式	Ⅲ	54.3	
	(3) 裁 54	D	Z	Ａ技法	櫛歯状	匙面１段	A-Ks3 式	Ⅲ	22.1	
	(3) 裁 55	D	Z	Ａ技法	櫛歯状	匙面１段	A-Ks2 式	Ⅲ	33.4	
	(3) 裁 57	C	Z	Ｃ技法	櫛歯状	匙面１段	C-Ks3 式	Ⅳ	33.1	
	(3) 裁 60	C	Z	Ｃ技法	櫛歯状	匙面１段	C-Ks2 式	Ⅳ	48.0	
	(3) 裁 61	D	Z	Ａ技法	櫛歯状	匙面２段	A-Kss3 式	Ⅲ	28.1	
	(3) 裁 64	C	Z	Ａ技法	櫛歯状	匙面２段	A-Kss3 式	Ⅲ	24.7	
	(3) 裁 66	C	Z	Ｂ技法	櫛歯状	匙面２段	B-Kss3 式	Ⅳ	46.0	
	(3) 裁 67	D	Z	Ｂ技法	櫛歯状	匙面２段	B-Kss4 式	Ⅲ	41.8	
	(3) 裁 69	C	Z	Ｂ技法	櫛歯状	匙面１段	B-Ks3 式	Ⅱ	26.1	斜面を区画する装飾帯
	(3) 裁 70	C	Z	Ｂ技法	櫛歯状	匙面１段	B-Ks3 式	Ⅲ	24.2	斜面を区画する装飾帯
	(3) 裁 71	C	Z	Ｂ技法	櫛歯状	匙面１段	B-Ks3 式	Ⅲ	91.6	斜面を区画する装飾帯
	(3) 裁 72	D	Z	Ａ技法	櫛歯状	垂直面	A-KpK3 式	Ⅱ	33.5	上下両側に斜面をもつ
	(3) 裁 46	C	Z	※	彫刻文	彫刻文		滑石	74.5	底面は上げ底をもつ

※複数の小孔を円周上にあけ、内部を抜き取る手法が復元されている（岩戸ほか 2017）。



1：石釧１(Y)　２：石釧２(Y)　３：石釧３(Y)　４：石釧４(Y)　５：鍬形石２(Z)　６：鍬形石１(Y)(表面)
７：鍬形石１(Y)(裏面)　８：紡錘車形石製品１(Z)　９：紡錘車形石製品４(Z)　10：筒形石製品(Z)

写真１　興戸２号墳に副葬された石製品